鎌倉女子大学紀要　第30巻　1-12頁　2023年１月
The Journal of Kamakura Women's University, Vol.30, pp.1-12, January 2023

原著論文

小学校受験における絵画、工作の考査：序論的考察

梨本　加菜（児童学科）

Drawing and Craftwork in Elementary School Entrance Examinations: An Introductory Study

Kana Nashimoto
Department of Child Studies, Kamakura Women's University

Abstract

In elementary school entrance examinations, drawing and craftwork require more than expressive skills and artistry, but rather the ability to understand and explain the context, and the overall ability to learn in a group as a child. In addition, they are generally expected to have figurative and "easy to understand" expressions. Early childhood education that prepares children for examinations is widespread in the Tokyo area, and methods have been established to help children learn forms of drawing and craftwork that can be completed efficiently. While this can be an opportunity for children to become familiar with drawing and crafts and expressing themselves, there is also a risk that they may avoid abstract and "hard-to-understand" expressions. It is necessary to view private art education activities as an object of collaboration between school education and regional education to develop better art activities for pre-school children.

Key words: elementary school entrance examination, private art class, drawing and craftwork, out-of-school art and cultural activities, elementary school course of study
キーワード：小学校入学試験、幼児教室、絵画・工作、学校外の芸術文化活動、小学校学習指導要領

１．はじめに：本稿の目的と構成

いわゆる「お受験」は、わずかな人数とは言え、就学前の子どもにとって初めてのフォーマルな学校教育の評価のまなざしと、結果としての選抜を受ける場である。受験生となる子どもが体験する絵画制作や工作等の考査にはどのような特徴があり、作品やその制作の過程に何が求められるか。また、各学校で評価の観点は異なるのか。受験対策を行う幼児教室や美術教室は、学校教育や美術教育と相対してどのような位置にあるか。

「お受験」には幼稚園受験もあろうが本稿は小学校受験に着目し、少子化や経済不況下でも拡大する受験産業及び民間の幼児教室の動向を確認し、「絵画」、「制作」等と呼ばれる考査の内容・方法と評価の観点とされる事項を整理し、学校外の芸術文化活動としての意義と課題を考察したい。なお、小学校入試及びその対策で使われる「絵画」等の用語は、小学校や幼稚園の教育課程で、また美術の領域で言われる語句と同一となり得ないこ

とは予め断っておく。

具体的には、まず2.で、小学校受験の概況と歴史的特質を文献研究から描写する。戦後は新教育運動や教育の現代化運動等の機運の中で美術教育に関わる民間団体や教室が台頭し、いわゆる経済成長とベビーブームも相まって「ならいごと」の教室や指導者が増え、それらの実践は学校教育や美術・造形教育、また地域の社会教育に少なからぬ影響を与えてきた。しかし特に小学校受験に関しては、現在も受験者の数や教育産業の規模が増加傾向にあると推測されるにもかかわらず、その入試の内容・方法、また受験対策を行う民間の教室の実情は詳らかではない。たしかに小学校受験者は同年代の子どものうち数パーセントに過ぎない上、選抜を伴う入試を実施する小学校からの情報提供は経営や広報上の制約から限られている。そのため、小学校受験に関する調査研究は傍系に置かれ、あるいはタブー視され、先行研究はきわめて乏しい現状にある。本稿2.ではそうした現状を含めて可能な限り文献から美術教育や幼児教室等の概史を描写し、論点を整理したい。

そして3.では、受験参考書の分析にもとづいて実際の考査の特徴を見ていきたい。特に東京都は他県に住む受験者がいるほど小学校受験が苛烈なエリアである。直近の学校基本調査の速報（2022年8月24日公開）によると、全国の19,161校の小学校（分校を含む）のうち私立校は243校で、その割合は1.3%である。児童数も、全国6,151,310人のうち私立校在籍者は79,882人で、これも全体の1.3%に止まる。つまり全国的には、私立の小学校と児童の数はいずれも1%強の些細な数でしかない。しかし東京都に限ると私立校の学校数と児童数の割合は両者とも4.1%に上る。全国の私立の小学校のうち22.6%が都内に所在し、それらに通う児童数は全国の私立校在籍児童数の10.1%に上る計算になる。また都内には「国立小学校」に該当する、国立大学法人が運営する大学の教育系学部の附属小学校が、特別支援学校を除いても6校も存在する。これらの私立・国立校は、先着順受付や抽選の場合もあるが、入学希望者が入学定員を超える場合に多くの学校では選抜試験が行われる。本稿は、小学校受験の実情に迫るため東京都の入試の状況に着目し、試験問題の特徴も見ていきたい。本稿4.では、これらをふまえた総括と考察を記す。

本稿は2021-2023年度鎌倉女子大学学術研究所研究助成「児童・青少年の美術活動を支える民間事業・地域施設の日独比較」の成果の一部である。当研究の一環で民間の美術教室の調査研究を進めるうち、受験指導は看過できない領域であると確信するに至った。受験とその対策は、主に保護者が子どもに強いる経験ではあるが、積極的に解釈すれば就学前の子どもが描画や造形、そして指導者に出会い、生涯にわたり自ら美術に親しむ一つの場となり得る。また、地域の芸術文化活動を活性化させる民間の教室や公的施設の役割と課題を改めて確認する契機にもなる。まずは本稿で、小学校受験の実情と課題を整理していきたい。

2．小学校受験をめぐる概史と論点の整理

小学校受験は戦前から続いている。小学校受験に関しおそらく初めての研究書を刊行した教育社会学者の小針誠は、大正期以降の入学選抜考査の動向を追い、今日も多くの受験生を集める慶應義塾幼稚舎、東洋英和女学校（小学科）、成城小学校、成蹊小学校等で選抜考査が始まった事由に、新教育の影響を受けた少人数教育の導入という、当時の一部の私立校の教育理念・方法の志向を指摘する[1)]。もっとも入学希望者が増え倍率が上がった背景に、小針は都市新中間層の教育志向の高まりと、心理学者による知能検査（メンタルテスト）の開発を遠因に挙げる。主な入試方法は行動観察を含む知能テスト、遊戯、リトミック、面接であり、純真無垢な「子どもらしさ」が求められたため文字や数字を扱う学力テストは忌避された[2)]。いわば学校側と都市の家族の思惑が合致した「目に見えない入学選抜考査」に対応するため、メンタルテスト対策を行う通信を含む民間教室や市販教材等の準備教育が普及していく。

21世紀以降も小学校受験は多くの受験者を集めている。小針に続き小学校受験の研究書を上梓し

た教育社会学者の望月由紀は、2010年度入試に際して首都圏と関西圏で家庭調査を行い、受験する家庭の実像と、親の学歴や家庭資産が子どもの状況を方向付ける「ペアレントクラシー」の課題を明らかにした[3]。受験対策の内容・方法は小針と同様に「見えない」故の葛藤が課題として示されているが、保護者の多くは子どもへの受験の影響を肯定的に捉えているという調査結果には注目させられる。受験対策として「巧緻性を高めるための材料の準備や環境づくり・機会づくりなども含めて「遊び」感覚で取り組んだり、それを発展させて日常生活にも関連づけ」る[4]例が多いとして、受験が子どもの育ちや家庭環境において肯定的な側面があることが指摘されている。

しかし他の教育社会学研究や、「お受験」として興味本位で報道される場合もあるマスメディアにおいては、膨大な時間とコストがかかる受験対策による幼い子どもとその家族の心身のストレス、早期教育とその合否判定がもたらす子どもの心身や、子どもの成長、将来の進路への影響、また過熱する受験産業に対する懸念が示される[5]。功罪を併せ持つ小学校受験であるが、戦後の略史をまとめた一覧が［表１］である。

戦後の動向を概観すると、第一に、終戦後の図画工作科、また中学校美術科の新設の前後より絵画や造形、版画等のさまざまな領域で展開された民間の指導者と学校教師による教育運動の機運の中で幼児教室が創設され、一部の教室では幼児対象のテスト実施や教材作成等が行われている。

そして第二に、1950、60年代に心理学研究にもとづく早期教育の教室や教材開発が拡大したこと、第三に、ベビーブームを迎えて子どもの数が急増した高度経済成長期以降は、総合的な受験指導や体操等とともに絵画制作や造形等の指導を行う中・大規模の教室が広がったことが挙げられる。

また第四に、中高生対象の予備校等が対象を低年齢化させ、通信教育だけでなく対面の教室運営も始めている。特に2002年の小学校設置基準の基準緩和以降は首都圏の早稲田実業学校初等部（東京都）、慶應義塾横浜初等部（神奈川県）をはじめ、愛知県内の南山大学附属小学校、京都府内の同志社小学校、立命館小学校、福岡県内の西南学院小学校等の伝統ある私立大学の下構型と言える小学校が開設され、大手の予備校の系列となる小学校受験対策が全国の都市部に拡大している。

同時並行的となるが第五に、主に女性の指導者が閑静な住宅地で近所の子どもを集めて始めた絵画や工作等の教室が組織化され、体育や総合的な受験対策等へと領域を拡大させた例が散見する。そして第六に、2000年代以降の大型化・多角化した教室や、教室運営のフランチャイズ化も挙げたい。新型コロナウィルスの感染症対策の影響で、オンラインの活用も広がっている。小学校受験は、表面上は門戸が広がったと言えよう。

しかしやはり小学校受験は一般的な家庭教育や幼稚園教育では対処が困難な、特別な技法が求められる分野である。例えば、1982年に絵画教室を開設した定評ある指導者が刊行した、保護者が「家庭で簡単に教えられる」ことを目的とした参考書では、人物の描き方として「肌色のクレヨンで〇と耳、首の線を書きます。（クレヨンを）洋服の色に持ち替えて〇より少し大きい真四角を真中に描きます」「全体のバランスが大事なので指５本を描かず簡単な形にしています」[6]といった具体的な方法を示す。出題から「何を描くか」を確認して構図を取り、制限時間を考慮して優先順位を考えて描くものを選択し、最後に色を塗るという一連の流れの練習を繰り返す必要も示される。

このように特別なスキルが必要となる分野であるが、子どもがさまざまな素材や色、形に親しみ、制作することに肯定的な環境の中で集中して絵を描き、工作することができる場として、小学校受験は貴重な機会とはなり得る。

しかし、それが「何」かが学校教員に分かる描写が求められるため、具象的で一般的に理解される形や色で表現する必要があり、抽象的で、いわば「分からない」表現は切り捨てられる可能性がある。幼児が指先や身体全体を使って素材と戯れ、特に完成像を持たずに「何か」を模索して制作を続けると時間切れで評価されないこととなる。個性を生かした「自由」な創作と、「分かる」表現への習熟の齟齬は指摘しておきたい。

3．入試問題に見る絵画・工作等の内容と特性

（1）考査の内容

実際の小学校入試において、5歳児は具体的にどのような活動内容・方法で考査され、どのような作品が生まれるのであろうか。

ベストセラーとされる年刊の受験参考書によると、代表的な選考内容・方法は「ペーパーテスト」、「行動観察」、「制作」、「面接」の4種類とされ、このうち「制作」は次のように説明される。

「画用紙やはさみ、クレヨンなどを用いて、先生の指示どおりに工作や絵画を制作する。表現力や創造性を見られるほか、指先の器用さや、先生の指示を聞いて手順に従って制作を進められるかを見ている。」[7)]

つまり受験における絵画や工作の作品は、単に表現力や創造性が問われるだけでなく、「ほか」に、指先の器用さや、テーマや材料、時間などの設定・手順を理解し守れるか、先生の指示を聞いて活動できるかが評価されると指南されている。

「指先の器用さ」は、受験対策の教材や幼児教室の指導内容で「巧緻性」と呼ばれる分野で、例えば靴紐を結ぶ、箸でビーズを移すといった所作や、複数の点を線でつなぐ「点つなぎ」がある。

集団で絵画制作や工作が行われる場合は主体性や、他の子どもとの関わりも評価の対象となる。例えばグループで紙コップを積んでいく課題では「コップが人数分ないとき、どう対応するか」が見られると言う。つまり他の子どもとの協調性やコミュニケーション能力なども判断基準となっており、作品の芸術性の高さや技巧の精緻さだけで評価される訳ではないと推察される。

このように小学校入試には特有の試験と評価が行われ、美術に関わる領域の教科の教育課程に収斂しきれない。例えば幼稚園教育要領では1989年改訂より健康、人間関係、環境、言葉、表現の5領域が示され、2017年改訂では「表現」のうち、特に絵画や造形に関して次の項目がある。

「（1）生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。

（2）生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。（中略）

（4）感じたこと、考えたことなどを（中略）自由にかいたり、つくったりなどする。

（5）いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。（中略）

（7）かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」

以上のように幼稚園教育要領では具体的な表現の種類や教具の指示はなく、幼児が興味・関心の赴くままに素材を確かめ、工夫し、想像をはたらかせて描いたり作ったりして楽しみ、制作物を飾るという柔軟な活動が示されている。

小学校学習指導要領の図画工作は、表現と鑑賞の二つの活動をとおして「造形的な見方・考え方」をはたらかせることが目指される。表現は、鑑賞よりウェイトが大きく、「造形遊びをする活動」と、「絵や立体、工作に表す活動」がある。それらの活動を通して、「身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れる」とともに、低学年の場合は次の技能を身につけることが目指される。

「（造形遊びを通して）並べたり、つないだり、積んだりするなど（中略）活動を工夫してつくる」

「（絵や立体、工作を通して）表したいことを基に表し方を工夫して表す」

材料や用具は、第1、2学年では「土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類など」が例示され、第3、4学年では板材、水彩絵の具などが加わる。

このように、小学校学習指導要領の「表現」は、身近な材料や用具に慣れ、「形や色」などを意識して「かいたり、つくったり」を楽しみ、「表したいこと」を「表すこと」が目指される。

以上のような幼稚園と小学校の教育課程の基準に対照させると、小学校受験の考査は高度な水準が求められることが分かる。「造形遊び」等の材料や用具は特殊ではないが、制限時間内に「表すもの」や用具等の細かな指示を理解し、テーマをもとにイメージした色や形を絵画、立体等として積極的に表し、完成させる。場合によってはグループの子どもや教員との対話と並行させ、集中力を

保って作業する能力も求められることとなる。

（２）東京都内の入試に見る考査内容の分類

（１）で見たとおり、小学校受験の考査は幼稚園および小学校の教育課程と異なる独自のコンテキストを持っており、使われる用語も異なる。そのため本稿は小学校受験の業界で70年近くの実績のある伸芽会教育研究所が刊行する『首都圏私立国立小学校合格マニュアル』[8]を参照し、①個別テスト、②集団テスト、③ペーパーテストの分類[9]から、「制作」に関する細目を整理した（表２）。

［表２］の分類にもとづき、『マニュアル』に掲載された東京都内の58校（私立52校、国立６校）の出題傾向の分析一覧で、次の細目に一つ以上が該当する（「○」がある）学校31校（私立21校、国立５校）を抜粋し、［表３］としてまとめた。

① 個別テスト：巧緻性、絵画・表現、制作
② 集団テスト：巧緻性、絵画・表現、制作
③ ペーパーテスト：模写、巧緻性、絵画・表現

一般に集中力を必要とする絵画・表現、制作等は①個別テストが多いかと思われたが、［表３］によると、絵画、制作に関する考査は、①個別より、②集団で行われる学校数が多い。一人で課題に向き合うより、子ども同士が共同で行う作業が求められる学校数が多いことが分かる。

一方で、巧緻性を問う課題は①、②、③の形態を問わず、比較的多くの学校で出題されている。③ペーパーの「模写」は、31校中10校で出題され、出題校が多いことが見て取れる。

こうした傾向は、共学校と女子校で異なるのだろうか。［表３］に抽出した前者21校、後者９校をまとめたものが［表４］である。９つの細目の出現数を見ると、わずかに女子校の方が多いが、母数が少ないこともあり、有意差と言えない程度である。ただし、①個別と③ペーパーの「巧緻性」、また③ペーパーの「模写」が９校中３校以上で出題され、比較的多いことは指摘しておきたい。

都内のうち23区（特別区）に所在する学校と、東京西部の郊外市部の学校の出題も比較しておきたい。［表５］がその特別区24校と市内７校の比較であるが、これも顕著な差は認められなかった。ただし、東京都の市部は特別区の西部を含めた巨大なベッドタウンとなっており、大正新教育を牽引した複数の私立校の伝統がある上、2002年に早稲田大学系列の初めての小学校が開校され、小学校受験の人気が高いエリアとなっている。2022年度は公立で全国初の小・中・高一貫校が新設され、初めての入試は通学区域制限があるにも関わらず、31倍の高倍率を記録した。この小学校は［表３］の該当外であるが、巧緻性が問われる運筆と塗り絵（色鉛筆の色は指定）が出題されており、絵画の制作に関わる考査内容が注目される。

さて、以上のように絵画・表現、制作の問題が個別テストでの実施に限られず、むしろ集団テストの中で実施する学校数が多いこと、また巧緻性が試される問題が今回対象とした31校のうち三分の一程度の学校で出題され、女子校の数がやや多いこと、そうした傾向は東京都の特別区と郊外では大差ないこと、ただし人気校の出現等により受験地図が塗り替えられる可能性があることを、全体の傾向として見出すことができた。

絵画・表現、制作等の試験は、クレヨン等の画材やハサミ等の道具の扱いに慣れておく必要がある上、初めての空間の中で他の子どもや試験監督に囲まれながらも設問を正確かつ即座に理解し、集中力を途絶えさせず「子どもらしい」筆致や発想を表現し、制限時間内に作品を完成させる、高度な問題と言える。これが②集団テストで行われる点は、2020年（入試は2021年度）以降に新型コロナウィルス感染症対策が求められる状況下で、さらにこの形式が増えたことにより注目される。

［表６］はコロナ禍前の2019・2020年度入試と、感染症対策が求められた2021・2022年度入試の２年分の考査の種類をまとめたものである。②集団テストの３つの細目はいずれも増えており、多くの学校で集団、つまり子ども同士の何らかの関係性を見るテストが、感染対策の徹底を厭わずに必須とされた傾向が見られる。小学校受験における絵画や工作物の制作は、他の子どもや大人の存在や作業の工程を意識し、ときに他の子どもと共同

作業を行ったり、完成品の有用性を試したり、制作のねらいや感想を語る力が求められたりする場合もあると推察され、単なる制作に止まらない観点や評価の指標が混在する活動であると言える。

（3）集団テストにおける考査の内容

それでは、実際にどのような考査がなされるのか、出題例を見てみたい。出題内容や考査の詳細は公表されないことが多く、受験対策に定評のあるこぐま会教材開発室または伸芽会教育研究所が、それぞれ独自に情報を収集して再現した内容（出版物）を引用することを断っておきたい[10]。

3（2）で触れたとおり、絵画等の制作を行うテストは個人単位より、集団（グループ）で実施される学校が多く、その傾向は、美術系の高校や大学の入試を考えると特異だと言える。その出題は、どのような内容で、何が見られているか。

集団テストは、子どもが共同で制作を行うものと、グループ単位で課題が出されるものに大別される。前者がまさに集団テストを代表する形式であるが、新型コロナウィルス感染症対策のため2021年度入試より実施が困難となっている。そのため2020年度入試の問題を抜粋する。以下は、ある2校で出された共同制作の問題である。

（その1）［表3］S校

グループごとの机の上に、お弁当に見立てて丸、三角、四角等が描かれた模造紙半分の大きさの紙、クレヨンが用意されている。（指示）「みんなで相談して、お弁当箱におかずを描きましょう。ただし、デザートの果物は描いてはいけません。」

（その2）［表3］X校

段ボール箱で作られたおみこし、お花紙、きらきらしたテープ、スティック糊、ハサミ等が用意されている。それらでおみこしに飾りをつける。

2校とも試験監督である「テスター」の合図で開始・停止する。またいずれも他の考査と合わせてストーリー性があり、S校では共同制作の最中に「お母さんの作るお料理で好きなものは何ですか」等と一人一人にテスターが質問し、考査の分野は「言語」として分類される。また、制作後に靴を脱いでビニールシートに上がり、「お弁当」をビニールシートに置き、お皿やお箸等を準備して一緒に食べる遊びをする。これは「行動観察」に分類される。X校では、テスターが叩く太鼓のリズムに合わせてスキップや行進をした後で共同制作としておみこし作りを始める。その後、行動観察に当たると推察される「お祭りごっこ」が行われる。好きな場所で自由に遊び、流れる音楽がお囃子に変わったら、グループで集まっておみこしをかつぎ、うちわや太鼓でお囃子をしたりする。つまり、単なる表現力に加え、共同での制作過程や制作物の活用をとおして協調性や積極性、言語力、所作等が評価されていることになる。

もう一つの集団テストとなる、グループ単位で課題が出される形式も見ておきたい。例年、絵画制作・工作の考査が実施される［表3］のC校の2020年度入試の問題は次のような内容である。

各自の机の上にポンキーペンシルとクレヨンが、それぞれの袖机に画用紙、スティック糊等が置かれている。その他は共用の机の上にあり、必要に応じて取りに行く。問題は日程や男女の別[11]、グループにより異なり、次のものがあった。

○ テスターから、博士が緑、黄色、赤、青の不思議なボタンを開発したお話を聞く。緑のボタンを押すと体が柔らかくなり、黄色は硬く、赤は大きく、青は小さくなる。もし赤か青のボタンを押したらどんなことをしたいか、画用紙にクレヨンで描く。

○ 自動販売機のお話を聞く。これまで見たことのない、こんなものを売っていたらいいなと思う自動販売機を考え、中央下部を四角く切り取った画用紙にポンキーペンシルで描く。さらにその自動販売機で売っている品物をカラー粘土で作る。制作後、画用紙をスタンドに立てて自動販売機役になる。テスターがお客さん役になって買いに来たり、絵や品物について尋ねたりする。

○ 墜落したUFOの宇宙人を助けたお礼に宇宙

人の住む星に連れていってもらうお話を聞き、どんな宇宙人かを考えて6色のカラー粘土で作る。その後、宇宙人とどのようなところへ行って何をするかをクレヨンで描く。

問題（お話）を即座に理解し、粘土での立体物の制作と描画の両方を行う等の難易度が高い課題である上、制作中にテスターから「何を描いていますか」等と質問され、答えるとその回答への質問が続くため、集中力の持続が問われる。

また、上記の問題例の二つ目のように、制作物を活用して見立ての遊びをしたり、三つ目の項目のように粘土で立体を制作後、その立体をモチーフにして平面の作画をしたりする等、一つの課題が次の課題へと展開するストーリーの理解と、制作手段の切り替えも必要とされることとなる。

同校の2021・2022年度入試は、集団テストの形式に変更はないが、感染症対策のため説明はモニターの映像視聴となり、席はパーティーションで区切られるため、他の子どもの動きを肌で感じることが難しく緊張の高まりや孤独感が懸念される一方で、難易度の高い課題に集中して取り組める利点もあるように推察される。

このように集団テストにおける考査は、小学校受験に特有な観点と方法をもって行われる。画材や用具を扱うスキルとともに、「何を描くか」、「どのように使うか」といった文脈を理解し、ときに他者と楽しんで制作し、テーマにそぐう客観性をもった作品を完成させ、語る必要がある。

（4）巧緻性

「巧緻性」も独自の様式である。例として、過去4年間の個別テストに「巧緻性」に該当する出題があった［表3］Y校の問題で、2020年度と、感染症対策の下での2022年度の二種類を、最後の片付けの部分を除いて抜粋する。

○2020年度

① （画用紙に描かれた）エビフライをハサミで切ります。周りの太い線からはみ出さないように切りましょう。
② 机の引き出しからクーピーペンシルと小さな紙を出して、好きな果物を一つ描きましょう
③ 引き出しからエプロンを出して立ってください。エプロンの紐を後ろで結びましょう。
④ 引き出しから紙皿を出してください。（TVモニターに映る）見本と同じように、机の上に置きましょう。
⑤ （TVモニターに映るお手本と）同じようにコップに入っているものをお箸でつまんで、お皿の中に入れましょう。

○2022年度

① クーピーペンシルで（台紙の）機関車に色を塗りましょう。いろいろな色を使って良いですが、赤、黄、緑は必ず使ってください。
② ハサミで機関車の周りの線を切りましょう。線からはみ出さないように切りましょう。終わったら、手をお膝にして待ちましょう。

2020年度の問題は、片付けに至るまでの細かな指示を聞き漏らさず、エビフライの尾の造作は切り落とさず、細かなビーズ類を紙皿に箸で指定どおり置く正確さ、操作性の高さが求められる。

2022年度の設問はやや簡易化されたが、色塗りとハサミの扱いのスキルが必要である。また、色塗りの途中で、順に箸の操作のテストが行われる。こぐま会の解説では、「周りで箸の操作をしている子どもがいる中で集中して作業ができるか」、「子どもの年齢に合う扱いやすいハサミを準備したか」等も見られた可能性があるとする。3（3）の集団テストと同様に操作性の高さだけではなく、集団の中での振る舞いや家庭環境まで、総合的に評価の対象に含まれる設問と言える。

（5）創造画と試験対策

個別テストに「創造画」と呼ばれる出題のジャンルがある。ある問題集では三角や渦巻き等の形が印刷してあり、その上に子どもが描き足していく方法であり、次のように説明される。

「与えられた線や形からイメージを膨らませて、一つの絵に仕上げていく課題です。それは、生活

の中にどんな形を発見できるかということでもあるのです。（中略）どのように描けば正解ということではないので、子どもなりの自由な解釈でよいでしょう。それよりも描き終えた後、必ず何を描いたのか説明して、この課題を行うことと一緒に表現力も養ってください」[12]

このように、クレヨン等を使って線や形、色を描いていき、「何か」を創作して説明する。実際の入試で、［表3］のR校の次の出題例がある。

「描いてある形を使って、絵を描きましょう。描いたものが出てくるお話を作って聞かせてください。」（2022年度入試）

この設問で予め描いてある形は丸と半円の二つのみである。この問題の解答例ではないが、ある受験参考書では出題例の「丸」について、「りんごのようなかんたんな絵よりは、たくさんかきこんだ絵のほうが創造性が高いと評価されます」[13] と解説していた。「うさぎ」が例示され、丸に手足や表情をつけて複雑な形にした方が「創造性が高い」と評価されるとのことである。そして、作られた「うさぎ」に関して彩色等の工夫やエピソードを語ることが受験の対策となる。

3．では巧緻性や創造画等、小学校受験に特有な方法を見たが、いずれも高度な技法や芸術性というより、制作のねらいや工夫を語れるか、楽しんで制作したか、共同制作の場合は子ども同士で協調できるか、教員と話ができるか等かが問われ、言語としての表現力やコミュニケーションの力が重視されると言える。多くの私立校や国立校には美術や図画工作を専門とする教員が置かれるためか、子どもの表現力を引き出す良質な発題が為されるものの、「これは何か」が言語として説明できる、具体的な「もの」の形や動きが「分かる」絵画や工作の表現が求められることから、結果として受験対策においては一般化された人物や動物、事物の形や色の制作と再現に成果物が偏る傾向があることは、課題として指摘しておきたい。

4．まとめと考察

以上、小学校受験の動向をふまえ、実際の考査の特徴も見てきた。4．では総括として二点をまとめ、今後の調査研究の展望を示したい。

第一に、小学校受験での絵画制作や工作は必ずしも美術作品としての高度な技能や芸術性が求められておらず、テーマを即時に理解してねらいをもって制作し、道具を器用に扱い、一方で「子どもらしさ」を発揮して制作を楽しみ、何をどのように工夫して作ったかを説明でき、ときに他の子どもと協調する力が評価される点を挙げたい。いわば学校教育において「集団」で学ぶための総合的な力が試される考査であると言える。

第二に、学校教員にそれが何かが具体的に分かる作品と制作過程が求められる点が指摘できる。受験指導において基本的な人物、生物等の描き方を習得することで、短時間で想像力を働かせ、テーマにそぐう絵や立体物を制作できる力は獲得され得る。その一方で、十分に素材やモチーフの色や形を観察したり感触を確かめたりすることがないまま、定型化された構図や形を描くことが目的化したり、抽象的な表現が忌避され、場合によっては自らの表現や作品が「分かる」基準に達しないとされて制作への苦手意識を持つことに繋がらないか、検討が必要と思われる。具体的な事物やその動きが「分かる」表現は学校教育でも重視されることから、描き始めから完成像を持たない、素材を観察して感触を味わいながら制作する抽象的な表現の意義を再認識する必要もある。

今後の課題となるが、学校教育の文脈とは異なる民間の美術教室や幼児教室の意義を、協働の観点から積極的に認めていく必要を挙げておきたい。学校外の、特に民間の営利事業や草の根の活動と見なされる活動は、フォーマルな教育制度及び教育学研究の対象外に置かれて実態そのものが明らかではない。しかしそれらの実践は子どもの美的感覚を育み、美術に親しむ環境を醸成する素地として、学校教育や社会教育において連携・協力し得る一つの領域と考えることができる。例えば1960年代に理科教育を中心とした民間教育運動とし

て「仮説実験授業」が盛んとなり、その中で「キミ子方式」と呼ばれる、すべての子どもが「たのしく」絵を描けるとされる方法が注目されたことが想起される。このような実践を掘り起こして再評価することも研究課題として求められる。たしかに家庭や自治体の経済状況や人的環境、また教育観に起因する教育格差が懸念されるが、小学校受験を私教育の問題として調査研究や教育制度の枠外に置かずに、美術教室をはじめとする学校外活動の一領域として捉える必要がある。

引用文献・脚注

1）小針誠（2009）『＜お受験＞の社会史：都市新中間層と私立小学校』世織書房。なお、同左（2015）『＜お受験＞の歴史学：選択される私立小学校　選抜される親と子』講談社の第2章にも関連する指摘がある。

2）同上、166頁

3）望月由紀（2011）『現代日本の私立小学校受験：ペアレントクラシーに基づく教育選抜の現状』［学術叢書］学術出版会

4）同上、133頁

5）濱名陽子（2010）「早くからの教育：幼児教育の普及と早期化」苅谷剛彦・濱名陽子他（2010）『教育の社会学：＜常識＞の問い方、見直し方』有斐閣、93-94頁では、「親の入試」である小学校受験の早期教育としての課題が指摘される。本田由紀（2008）『家庭教育の隘路：子育てに圧迫される母親たち』勁草書房、片山かおる（2001）『お受験』文藝春秋は、家庭教育や受験対策に過熱せざるを得ない保護者を取り巻く社会構造の問題が示される。

6）湯原利枝（2010）『小学校受験で合格するための絵の描き方』現代書林、12頁。

7）「ビギナー父母でも安心 まるわかり小学校受験ガイド」『プレジデントムック 日本一わかりやすい小学校受験大百科 2023完全保存版』プレジデント社、88-93頁

8）伸芽会教育研究所監修（2022）『2023年度入試用首都圏私立・国立小学校合格マニュアル』株式会社伸芽会

9）同上、27頁

10）設問例は次の過去問集（2023年度入試対策）を参照した。こぐま会教材開発室編集（2022）「過去問とっくん（別冊あり）」幼児教育実践研究所発行・・・立教女学院小学校、早稲田実業学校初等部、東京学芸大学附属小金井小学校、東京都立立川国際中等教育学校附属小学校。伸芽会教育研究所監修（2022）「有名小学校合格シリーズ」株式会社伸芽会発行・・・お茶の水女子大学附属小学校・東京学芸大学附属竹早小学校（T-02）、国立学園小学校（T-05）、慶應義塾幼稚舎（T-06）、白百合学園小学校（T-10）、成蹊小学校（T-11）、成城学園初等学校・玉川学園小学部（T-12）、聖心女子学院初等科（T-13）、雙葉小学校（T-26）。

11）共学校では女子と男子で異なる出題がされる学校があり、試験内容の男女差を検証する場合は実態を含めたさらなる分析が必要と思われる。

12）こぐま会教材開発室『形を使った創造画』［ひとりでとっくん 20］幼児教育実践研究所こぐま会（発行年不詳）

13）あきやまかぜさぶろう（2016）『1日10分で難関小学校に合格する絵のかきかた』講談社、117頁

要旨

小学校受験において絵画制作や工作の考査は、表現の技能や芸術性というより、文脈の理解力や説明する力や、子どもらしく集団で学ぶための総合的な力が求められている。また、具象的で「分かる」表現が求められている。受験対策を行う幼児教室は首都圏で普及しており、効率的に描画や工作を完成させる様式に習熟させる方法が確立されている。子どもが絵画や工作に親しむ機会となる一方で、抽象的で分かりにくい表現が忌避される恐れがある。民間の美術教育の営みを、学校教育や社会教育の連携の対象として捉え、よりよい美術活動を発展させる必要がある。

（2022年9月15日受稿）

表 1　戦後の図画工作科教育、民間美術教育運動、小学校受験対策を行う幼児教室に関する主な事項

年	凡例:「*」は文部科学省(旧・文部省)の施策、「◎」は全般的な教育動向
1946	*「図画、工作の授業について」通牒(旧教科書使用禁止。創造力・個性伸長、共同製作の推奨。)
1947	*図画工作科の誕生・必修化(造形的創造活動等が目標に)。「学習指導要領図画工作編試案」刊行。
1948	*「保育要領」が刊行。副題は「幼児教育の手引き」。
1948	尾張一宮で全国図画工作教育連盟(1961年に全国造形教育連盟に)第1回研究大会開催
1949	◎描画教育盛んになる
1951	日本教育版画協会創立(日本作文の会、日本作文教育全国協議会と関係)
1952	真岡市で創造美育協会設立、宣言発表。新しい画の会の発足(1959年に全国組織化)。
1953	上野で日本美術教育連合発足、規約発表
1954	桐花教育研究所(後の株式会社トーケン)設立。1956年より年長児の公開テストを始める。
1955	*小学校で図画工作科の検定教科書使用開始(児童作品を多く入れて編集)
1955	造形センター発足 ◎デザイン教育、版画教育盛んになる。
1956	*「幼稚園教育要領」刊行。健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の6領域が示される。
1956	株式会社伸芽会が目白に設立。幼児教室、託児保育施設等を運営。
1956	福音館が月刊絵本『こどものとも』創刊(1969年に『かがくのとも』創刊)
1957	教師養成研究会幼児教育部会『幼児の絵画製作』刊行(創造的な自己表現を主体とした絵画製作への転換)
1958	*小学校学習指導要領改訂・告示化 ◎経験主義から傾倒主義への転換
1959	桐花教育研究所が桐花会3歳児クラス(週3日制)開講。年長児の第1回臨海合宿を実施。
1961	桐花教育研究所が早期教育スクール「みどり会」開設。
1963	主に理科教育分野で「仮説実験授業」提唱(1970年代に仮説実験授業の講習会で描画指導法「キミ子方式」が紹介される)
1965	知能研究所、飯田橋教育センター内に設立。英才教室(後の知能教室)開設。
1965	東京にて国際美術教育会議開催
1968	*小学校学習指導要領改訂 ◎教育の現代化
1970	株式会社日本幼児教育センター、下高井戸に設立。幼児教育相談、教材開発を行う。
1971	◎第二次ベビーブーム(1971−1973年の年間出生数が200万人を超える)
1972	*私立幼稚園就園奨励費補助事業が市町村で開始され、就園率が高まる
1972	日本教育研究所が国立にて幼児教室にっけん設立(2020年閉鎖)
1976	しょうがく社(株式会社奨学社)、大阪に設立。幼児教室・小学校低学年進学塾を運営。
1977	*小学校学習指導要領改訂(特別活動、道徳、体育、音楽、図画工作の時間数の増加)
1979	アトリエ太陽の子(太陽の子芸術教育研究所)設立。横浜を中心に絵画・造形教室を開設。
1980	株式会社福武書店(1955-、後のベネッセホールディングス)が進研ゼミ「小学講座」開始
1980	主婦の友社の教育関連事業として幼児教育雑誌『リトルランド』刊行(1983まで)
1981	理英会(株式会社理究)、横浜に設立。幼小受験の教室開設。
1983	日本幼児教育センターの子会社として株式会社幼児教育実践研究所(通称「こぐま会」)設立
1983	アトリエ太陽の子が主婦の友社の教育関連事業の提携教室となる
1987	桐花教育研究所が「表現教室」(生活体験や表現を中心とするクラス)開設
1987	こぐま会の教材『ひとりでとっくん』シリーズ刊行開始(1994年より書店で取り扱い開始)
1988	株式会社福武書店が進研ゼミ「幼児講座」(後の「こどもちゃれんじ」)開始
1989	*幼稚園教育要領(健康、人間関係、環境、言葉、表現の5領域)と小学校学習指導要領(生活科設置)の同時改訂・告示
1996	四谷大塚進学教室(1954年-)が小学校低学年対象の通信教育「リトルくらぶ」開始
1998	*小学校学習指導要領(生活科を核とした合科的な指導の推進)、幼稚園教育要領の告示
1999	実力増進会(1931年-、後の株式会社Z会)が通信教育「小学生コース」開始
1999	四谷大塚進学教室が小学校1-3年生対象の通塾教室「リトルスクール」開始
2002	*小学校設置基準緩和。都市部で私立大学附属小学校の開設が進む。
2004	実力増進会が「小学生コース」に一年生コースを開講。こぐま会が幼児教室開設。
2005	主婦の友リトルランド(後の株式会社リトルランド)設立(主に首都圏でのアトリエ太陽の子等と提携した幼児教室の展開)
2006	プレジデント社が『プレジデント Family』季刊化(受験対策情報を掲載)
2008	*小学校学習指導要領・幼稚園教育要領告示 ◎2006年教育基本法改正、2007年学校教育法改正(普通教育の教育目標)の反映
2010	株式会社Z会(旧・実力増進会)、通信教育「幼児コース」年長コース開講(2011年に年中、2013年に年少コース開講)
2015	株式会社アンファン、河合塾グループとして名古屋に設立。エコール・ドゥ・アンファン運営。
2019	*10月より「幼児教育・保育の無償化」開始
注:	文部省(1972)『学制百年史』帝国教育行政学会、山形寛(1967)「日本美術教育史図表」(山形寛『日本美術教育史』黎明書房、2-11頁)、文部科学省と民間事業者のWebサイトを参考に作成した。

表 2　小学校受験における考査の種類（伸芽会教育研究所監修（**2022**）『**2023**年度入試用首都圏私立・国立小学校合格マニュアル』株式会社伸芽会より作成）

種類	①個別テスト	②集団テスト	③ペーパーテスト
目的	思考、工夫力を見る	集団での行動観察	話の記憶、数量、常識、言語、推理・思考、観察力、記憶、構成
設問例	口頭試問、構成、巧緻性、生活習慣の課題	グループで絵を描く、制作、ゲーム、ごっこ遊び	録音した音声や口頭での指示を聞き取り、絵を見て解答する
ポイント	課題に対する理解度、質問への反応、会話の滑らかさ、言語表現力	集団の中での協調性、コミュニケーションの取り方	指示を聞き取る（文字や数字はあまり使用されない）
対策例	操作力が要求される課題（パズル、積み木）に備え、巧緻性や発想力を高めておく。	初対面の子ども同士で課題をこなし、積極的に自分の意見を伝える。	印や筆記用具の色などの指示に対応する。イメージしづらい未体験の領域を具体物を使って体験しておく。短い時間で解答するため、日常生活で時間を意識する。
絵画・制作関連	巧緻性 絵画・表現 制作	巧緻性 絵画・表現 制作	模写 巧緻性 絵画・表現

表 3　**2022**年度入試で絵画・造形等に関する考査の出題があった小学校と考査の種類（**A-Z** は私立校、ア～オは国立校）

No.	校	募集	23区	①個別 巧緻性	①個別 絵画・表現	①個別 制作	②集団 巧緻性	②集団 絵画・表現	②集団 制作	③ペーパー 模写	③ペーパー 巧緻性	③ペーパー 絵画・表現
1	A	共学	○					○	○	○		
2	B	共学	○				○					
3	C	共学	○					○	○			
4	D	共学	○						○			
5	E	共学	○									
6	F	共学	○									
7	G	共学	○					○		○		
8	H	共学	○								○	
9	I	共学	○							○		
10	J	共学	○				○			○		
11	K	共学	×								○	
12	L	共学	×				○		○			
13	M	共学	×							○		
14	N	共学	×				○	○	○			
15	O	共学	×					○	○			
16	P	共学	×	○	○					○		
17	Q	女子	○					○			○	
18	R	女子	○	○	○							
19	S	女子	○							○		
20	T	女子	○	○					○		○	○
21	U	女子	○					○				
22	V	女子	○				○			○		
23	W	女子	○				○		○	○	○	
24	X	女子	○								○	
25	Y	女子	○	○		○						
26	Z	男子	○					○	○			
27	ア	共学	○	○			○	○	○			
28	イ	共学	○				○	○	○			
29	ウ	共学	○						○			
30	エ	共学	○				○			○		
31	オ	共学	×				○					

注：「①個別」は個別テスト、「②集団」は集団テスト、「③ペーパー」はペーパーテストの略称。本表は伸芽会教育研究所監修（2022）『2023年度入試用首都圏私立・国立小学校合格マニュアル』株式会社伸芽会　に示された考査の種類の分析にもとづき、筆者が作成した。

表 4　**2022**年度入試における絵画・造形等に関する考査の種類別の件数と共学校・女子校の内訳　＊学校数は全**31**校

考査の種類別、共学校・女子校	①個別 巧緻性	①個別 絵画・表現	①個別 制作	②集団 巧緻性	②集団 絵画・表現	②集団 制作	③ペーパー 模写	③ペーパー 巧緻性	③ペーパー 絵画・表現	件数	件数／校数
校数（n=31）	5	2	1	10	10	12	10	6	1	57	1.84
うち共学21校	2	1	0	8	7	9	7	2	0	36	1.71
うち女子９校	3	1	1	2	2	2	3	4	1	19	2.1

表 5　**2022**年度入試における絵画・造形等に関する考査の種類別の件数と特別区（**23**区）内の学校数との市内の学校数の内訳　＊学校数は全**31**校

考査の種類別、特別区内と市内	①個別 巧緻性	①個別 絵画・表現	①個別 制作	②集団 巧緻性	②集団 絵画・表現	②集団 制作	③ペーパー 模写	③ペーパー 巧緻性	③ペーパー 絵画・表現	件数	件数／校数
校数（n=31）	5	2	1	10	10	12	10	6	1	57	1.84
うち特別区24校	4	1	1	7	8	9	8	5	1	44	1.83
うち市内７校	1	1	0	3	2	3	2	1	0	13	1.86

表 6　新型コロナウイルス感染症対策を背景とした絵画・造形等に関する入学考査の種類別の件数の変化　＊学校数は全**31**校（件数は各 **2** 年度分の合計）

コロナ禍前とウィズコロナ	①個別 巧緻性	①個別 絵画・表現	①個別 制作	②集団 巧緻性	②集団 絵画・表現	②集団 制作	③ペーパー 模写	③ペーパー 巧緻性	③ペーパー 絵画・表現	件数	件数／校数
2019・2020年度	14	2	2	13	8	20	18	13	2	92	1.48
2021・2022年度	10	3	3	19	14	24	19	12	1	105	1.69

注：「①個別」は個別テスト、「②集団」は集団テスト、「③ペーパー」はペーパーテストの略称。表４-６は伸芽会教育研究所監修（2022）『2023年度入試用首都圏私立・国立小学校合格マニュアル』株式会社伸芽会で示された考査の種類の分析にもとづき、筆者が作成した。